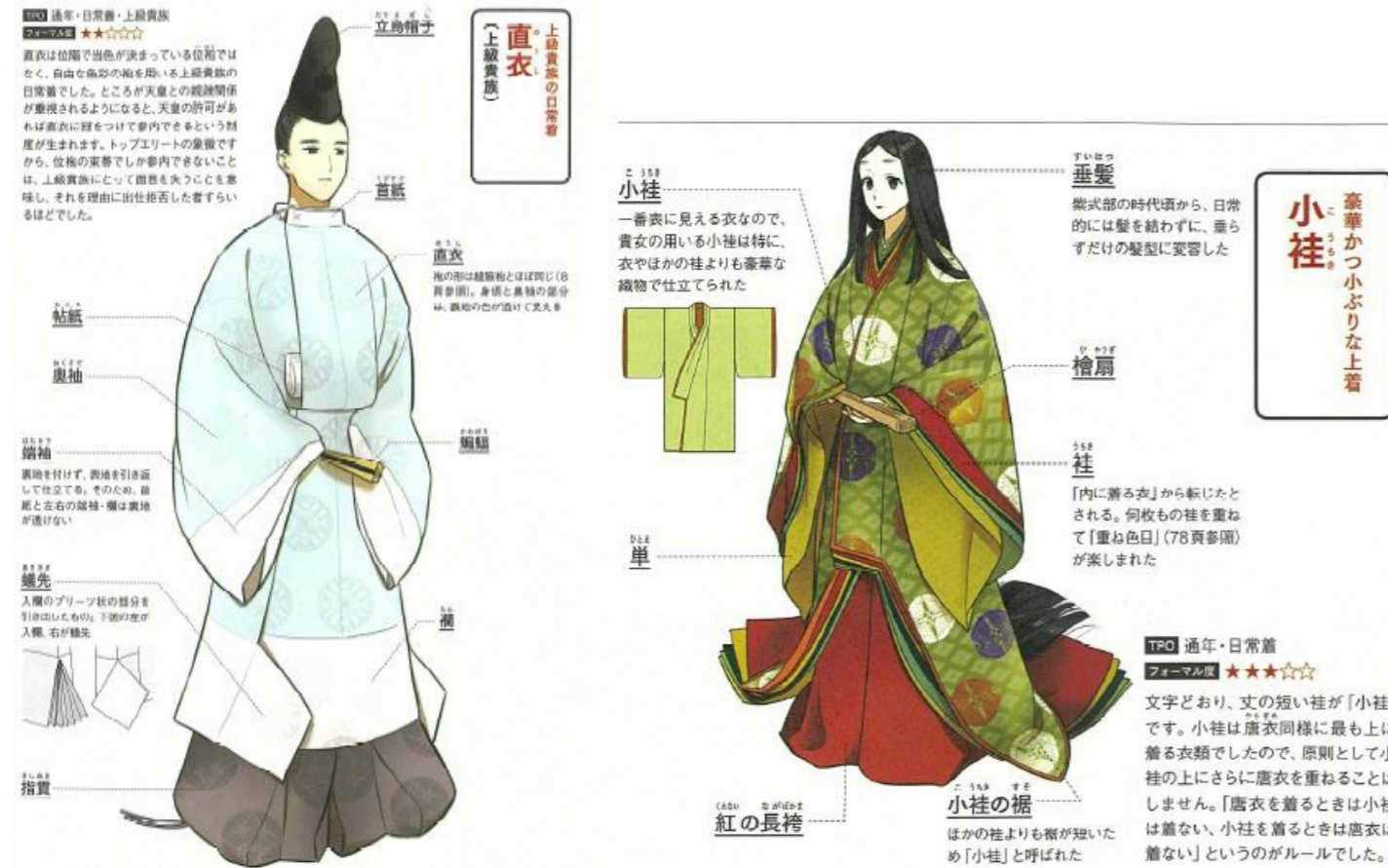


## 鴨川サインのデザイン（案）における装束の考え方の検討

ピクトサインのデザインとして、京都らしさを踏まえ、男性・女性を当時の装束をモチーフとしてデザインを検討しました。一方で、鴨川府民会議において、装束についての歴史・文化を踏まえたデザインが望ましい旨のご意見をいただいたことを踏まえ、鴨川の平安時代からの使われ方や歴史・文化、平安時代における装束の意味合い（TPO）を踏まえて検討を行うものとします。

**結論：男性は、貴族の日常着である「直衣（のうし）」 女性は、貴族の日常着である「小袿（こうちぎ）」を参考としたピクトの作成が望ましいと考えられます。**



### 1. 鴨川の歴史

#### ① 平安京と鴨川

平安京にとっては、神聖な川として尊ばれ、宗教的な儀式の場として活用  
 現代でも鴨川の伏流水は神事に用いられている

延暦13年(794年)の桓武天皇による平安遷都の際、鴨川は四神相應<sup>※1</sup>の地相でいう「東の青龍」にあたる重要な川とされていました。依頼、鴨川は神聖な川として尊ばれ、その水は古くから宗教的な儀式に重用されていました。上賀茂神社境内にはその支流である「ならの小川」が流れ、「明神川」と名を変えたのち、その水は社家町<sup>※2</sup>の家々に取り込まれ、かつては神官たちの禊に供されていたとのことであり、下鴨神社においては、今もなお、鴨川の伏流水<sup>※3</sup>を御手洗池に集め、清めの神事に用いられています。



※1 四神相應：天の四神の方角に相應した地上で最良の地勢で、東に流水（青龍）、西に大道（白虎）、南にくぼ地（朱雀）、北に丘陵（玄武）のある土地を言う。平安京はそれにかなう地で、諸説ありますが、青龍—鴨川、白虎—山陰道、朱雀—巨椋池、玄武—船岡山とされています。  
 ※2 神主さんなど神職の住宅が集まる町のこと。  
 ※3 伏流水：河川の流水が河床の地質や土質に応じて河床の下へ浸透し、水脈を保っているきわめて浅い地下水。

### ② 鴨川とまち・人との関わり

儀式などの神聖なものに加えて、生活用水・人々の暮らし・文化・産業に密接に関わる

鴨川は、平安遷都以来、都に住む人々の暮らしに密接に関わっています。鴨川を神聖な川として清浄を保つため、狩猟で捉えた獲物を洗うことを禁じた命令（承和11年(844年)）や、鴨川の河原が埋葬地であったことを示す記述（「続日本後期」）、さらには放牧や漁など鴨川と人々の暮らしとの関わりを描いた数多くの絵図や書物からも伺うことができます。

平安京のまち中には、大路、小路に沿って水路が設けられていたと言われており、鴨川の水やその伏流水は、これらの水路を潤し、生活用水や灌漑用水として人々の暮らしを支えるとともに、茶の湯に代表される京都の水文化や織物・食など、様々な伝統産業を育んできました。

また、鴨川の河原は、都における数少ない広い空間であったことから、店や芝居小屋が建ち並び、多くの人々が集い、そこから観阿弥・世阿弥父子による能楽や出雲阿国による歌舞伎、菅阿弥による庭園芸術など多くの優れた文化が生まれました。また夏の河原の夕涼みは、江戸時代に入り「納涼床」として形態を整えたとされており、今もなお京都の夏の風物詩となっています。



鴨川の河原は、このような文化的背景をもつ一方で、多くの人々が集まるがゆえに、見せしめのための処刑場など政治的にも利用されていました。

### ③ まとめ

鴨川は、神聖な川としての一面だけでなく、生活用水・文化・産業の活動の場としても使われており、**平安貴族や神官だけでなく、市民にも広く使われていた**ことが分かりました。

そのため、**装束については、当時の「装束」の意味合いやTPOを正しく理解し、過度にフォーマルではない装束から設定することが望ましい**と考えられます。また**男女の装束もTPOに合わせて同じ場面での装束に合わせる**ことが望ましいと考えます。

（良くない例：男性が「束帯（出仕時の服装）」、女性が「単袴姿（部屋着）」≠スーツとパジャマ姿）



## 2. 平安時代の装束の意味合い

「日本の装束解剖図鑑（著：綺陽装束研究所主宰 八條忠基氏）」によると、平安時代の装束は、10世紀ごろ、11世紀ごろ、12世紀ごろでそれぞれ特徴があるとされています。

### ■平安時代の装束の特徴

	女性	男性
平安10世紀頃	<p><b>唐風から国風へ十二単の誕生</b>  <b>清少納言の時代の日常着が紫式部の時代の礼装に</b>                      「乙姫さま」のような唐風の女性装束が、いわゆる「十二単」のような国風装束に、いつ、どのような理由で変容したか正確にはわかっていません。ですが、「枕草子」には上を上げて櫛を挿す描写があり、「紫式部日記」ではそういう服装を特殊なものとして表現していることなどから、その頃に変化が生じたと考えられています。</p> <p><b>多彩な色や文様を日常に盛り込む</b>                      女房装束が侍女・女房たちの勤務時の服装であったのに対し、后妃など貴女が人前に出るときの装いは「小袿」でした。これは小袿の下に着る袿よりも丈の短いもので、刈丈（立った時にちょうど床までの長さとなる丈）であったとされています。「紫式部絵巻」で、女房装束を着る母・源倫子に対座する中宮彰子が小袿を着用している姿が見られます。女房達の日常着は、「衣袴」や「袿袴」と呼ばれるもので、袴の上に衣や袿を何枚も重ねました。10世紀はまだ肌着としての小袖はなく、裸の状態で袴をはき、単を肌着として、その上に衣を重ねて羽織るだけの簡単な姿でした。</p>	<p><b>摂関政治とともに変化した装束</b>                      摂関政治の時代になると、藤原氏一族が公卿階級の多くを占めるようになります。政治的な会議は親族同士の私的なものへと変化し、律令による「位階」よりも天皇との親疎関係による「殿上人」という立場が重視されるようになりました。それまで大極殿で椅子に座って行われていた政務が、天皇の私邸である清涼殿の殿上の間で、靴を脱いで座って行われるようになったのです。                      直接床に座るような勤務スタイルになると細身の「朝服（ちょうふく）」では窮屈なため、装束は次第に大きく、ゆったりと仕立てられるようになり、朝服ではなく、「束帯（そくたい）」とよばれるようになりました。</p>
平安11世紀頃	—	<p><b>栄華を極めた貴族たちの着こなし</b>                      長保2(1000)念、藤原彰子が中宮となり、その父である藤原道長が政界を支配するようになりました。後に道長が「この世を我が世とぞ思う」とうたった摂関政治の頂点、王朝文化が開花します。上級貴族たちは栄華を誇り、装束の国風化や、ゆったりとした寛かつ化が一層に進みました。                      一方で、道長が前例を無視する専横が目立ち、それまでの装束ルールを平気で逸脱するようになり、前代の日常着を公式の服装として扱うことも多く、「直衣」姿での参内も以前よりも多く見られるようになりました。野外の運動着であった「狩衣」を日常着として多用するようになったのも、このころからでした。</p> <p><b>贅沢を競う雅の時代</b>                      藤原道長は華やかさを好んだ一方で、国政担当者として華美やぜいたくをいましめる立場にもあり、何度もぜいたく禁止令を出していました。特に装束のサイズについては、あまりに大きくなることを禁じ、袖丈の規制をしていました。しかし、国政のトップの道長自身がぜいたくを好んだため禁令は行き届かず、貴族たちが豪華さを競う傾向は続きました。冠がそれまでの柔らかい「頭巾」から漆を塗って硬化させたものとなり、巾子を高くするようになったのもこの時代からと考えられます。また、位当色にも大きな変化があり、四位以上が黒、五位が深緋、六位以下が深縹と、3区分になったのもこのころでした。</p> <p><b>束帯から派生した新たな装束</b>                      正式な朝廷勤務服である束帯に対して、いくらかカジュアルな服装がこの頃から用いられるようになりました。「朝廷」という言葉が示すように、律令に定められた役所の勤務時間は夜明けに始まり午前中で終わる、朝型勤務でした。照明具が発達していない当時、それが当然のことだったのです。しかし、11世紀頃から勤務時間はルーズになり、特に上・中級貴族たちは夕方から夜に会議を行うことも多くなり、そのまま宴会になることもしばしばでした。勤務スタイルが立礼から座礼へと変化したこともあいまって、窮屈な束帯以外の装束が望まれるようになっていったのです。</p>
平安12世紀頃	<p><b>風流さと優雅さを誇る謎多き装束</b>                      10世紀末にいわゆる「十二単」の形式になったと思われる女房装束は、11世紀には華美を競うようになり、衣を20枚も重ねて立ち上がれなかったという話が伝わるほど豪華なものとなりました。衣の重ねる色のコーディネート「重ね色目」は、自然の美しさを衣に反映させる雅な美意識でした。12世紀の美意識「風流」が、女性装束にも影響を与えました。十二単について当時の文献にも、裳に玉が付けられていたり、唐衣に形状不明な紐がつけられていたりした、とあります。その名も「風流」と呼ばれる造花をつけたり、金箔で飾り立てたりもしました。しかし、その実際の姿は不明な点も多く、よくわかっていません。</p> <p><b>風流の流行から生まれた独自の姿</b>                      12世紀に大変人気があった女性遊芸者が「白拍子」です。「平家物語」や「源平盛衰記」に登場する、平清盛の寵愛を受けた祇王・祇女、仏御前や、源義経の愛妾・静御前は有名で、後白河法皇も白拍子に入れ込むなど、上流階級にもてはやされました。当時の流行歌謡である「今様」をうたい、それに合わせて舞う芸を披露することが主な仕事です。鳥羽上皇の時代に、島の千歳・若の前という2人の遊女が創始したと言われています。「源平盛衰記」によれば、その舞衣装は男女混合の不思議なものだったようです。「男装の麗人」という、風流の時代らしい一種倒錯した美が愛好されたと考えられています。</p>	<p><b>摂関政治から院政へ 新たな装束の派生</b>                      12世紀になると摂関政治は衰えを見せ、上皇による「院政」の時代がはじまります。特に白河上皇は「治天の君」とよばれる立場を確立し、強権をもって政治を行いました。天皇の御所「内裏」は前例を重んじた儀式だけを行う場となり。上皇の「院御所」は、前例にとられない形で政治を行う場となりました。この時代に、儀式の場となった内裏の服装である束帯が形式化し、肩当などを用いる堅いフォルムになりました。これは「強装束」と呼びます。とても一人では着装できない装束となり、専門の着装技術「衣紋道」が生まれました。これに対して院御所では、平服の烏帽子狩衣で政治を行うという、いわば装束の下剋上が起きました。</p> <p><b>風情の「雅」から華美の「風流」へ</b>                      前例にとられない自由な院御所の気風は、貴族たちの美意識にも影響しました。そえまでの自然の風情を大切に「雅」から、サイケデリックなほど派手で豪華な美を主張する「風流」の時代となったのです。束帯の着付けが堅い直線的なフォルムを持つ「強装束」になったのもその影響と考えられています。この時代に、武士が台頭し始めました。平治元(1159)年の平治の乱で政治権力を獲得した平清盛は、基本的には貴族文化のなかにいましたが、武士の文化も導入していきました。治承4(1180)念の福原遷都の頃には、貴族たちも武士の装束「直垂」を着用するようになったと「方丈記」に記されています。</p>



■女性の装束の変遷

	フォーマル ←				→ カジュアル
平安 10 世紀頃	<p><b>物具装束 (もののぐしょうぞく)</b></p> <p>宝篋冠 結い上げた髪に付けるティアラ状の髪飾り</p> <p>唐衣の襟 襟は風通すので、裏地の色が見える</p> <p>領巾 奈良時代から平安の唐風装束の名物</p> <p>袖籠 袖を隠したり、背の隅を高めたりする小道具としても用いた</p> <p>唐衣 一番上に着る「背子(はいし)表着</p> <p>五衣 唐衣の上から着る、袖を穿かぬ、この上に唐衣を着る</p> <p>単 下半身を覆っていた襦(もの)の前が開き、後ろに引くだけになった形式の表</p> <p>紅の長袴 唐風装束の名物。裳の左右に並らす飾り紐</p> <p><b>重儀のみ</b></p>	<p><b>女房装束 (にようぼうしょうぞく)</b></p> <p>唐衣 襟を穿かぬので、裏地の色が見える</p> <p>髪上げた髪飾り 漢の髻(うぶ)の時代までは、日常の髪は上げず、髪飾りをつけて</p> <p>唐衣の襟 襟を穿かぬので、裏地の色が見える</p> <p>五衣 唐衣の上から着る、袖を穿かぬ、この上に唐衣を着る</p> <p>単 下半身を覆っていた襦(もの)の前が開き、後ろに引くだけになった形式の表</p> <p>紅の長袴 唐風装束の名物。裳の左右に並らす飾り紐</p> <p><b>出仕時</b></p>	<p><b>小桂 (こうちき)</b></p> <p>小桂 一番表に見える衣なので、貴女の用いる小桂は特に、衣やほかの袴よりも豪華な織物で仕立てられた</p> <p>垂髪 儀式の時代頃から、日常的には髪を結わずに、垂らすだけの髪型に変わっていった</p> <p>櫛屋 「内に着る衣」から脱ぎ捨てられる。何枚もの袴を重ねて「重ね色目」(7枚重ね)が愛された</p> <p>紅の長袴 唐風装束の名物。裳の左右に並らす飾り紐</p> <p><b>日常時</b></p>	<p><b>衣袴姿 (きぬばかますがた)</b></p> <p>桂 「源氏物語絵巻」や「伴大納言絵巻」にも数多く登場した。何枚も重ねる衣の色を変えて「重ね色目」を楽しむことも行われた</p> <p>紅の長袴 唐風装束の名物。裳の左右に並らす飾り紐</p> <p><b>日常時</b></p>	<p><b>単袴姿 (ひとえばかますがた)</b></p> <p>単 11種の「は黒のてし」</p> <p><b>夏の部屋着</b></p>
平安 11 世紀頃	(資料なし)				
平安 12 世紀頃	<p><b>晴の汗衫 (はれのかぎみ)</b></p> <p>汗衫の首紙 儀式のときは開襟にし、下に着ているものを見せた</p> <p>汗衫(晴の汗衫) 後身頃が長い開襟袖(けつてきのほつ)のような形</p> <p>唐衣 一番上に着る</p> <p>引腰 唐衣の上から着る、袖を穿かぬ、この上に唐衣を着る</p> <p>単 下半身を覆っていた襦(もの)の前が開き、後ろに引くだけになった形式の表</p> <p>紅の長袴 唐風装束の名物。裳の左右に並らす飾り紐</p> <p><b>儀式時</b></p>	<p><b>女房装束 (にようぼうしょうぞく)</b></p> <p>鬘削 成人女性の証として、権者などが鬘(びん、耳より前)にある左右両側の髪を短く切る儀式を行った</p> <p>唐衣 一番上に着る</p> <p>引腰 唐衣の上から着る、袖を穿かぬ、この上に唐衣を着る</p> <p>単 下半身を覆っていた襦(もの)の前が開き、後ろに引くだけになった形式の表</p> <p>紅の長袴 唐風装束の名物。裳の左右に並らす飾り紐</p> <p><b>出仕時</b></p>	<p><b>白拍子の装束 (しらびょうしのしょうぞく)</b></p> <p>立烏帽子 本来、髪を結わない立烏帽子を固定できないので、垂髪(すいはつ)に立烏帽子という姿は演劇上の演出である</p> <p>水干 当初は直っていた</p> <p>袖 唐衣の上から着る、袖を穿かぬ、この上に唐衣を着る</p> <p>露先 唐衣の上から着る、袖を穿かぬ、この上に唐衣を着る</p> <p>太刀 初期の白拍子は太刀を帯びていたが、後に省略されるようになった</p> <p>紅の長袴 唐風装束の名物。裳の左右に並らす飾り紐</p> <p><b>日常時</b></p>	<p><b>結い上げた髪</b></p> <p>白拍子が烏帽子をかぶるのは、初期だけだったようである</p> <p>水干 当初は直っていた</p> <p>袖 唐衣の上から着る、袖を穿かぬ、この上に唐衣を着る</p> <p>露先 唐衣の上から着る、袖を穿かぬ、この上に唐衣を着る</p> <p><b>宴席時</b></p>	



■ 男性の装束の変遷

フォーマル

カジュアル



平安 10 世紀頃

束帯 (そくたい)



退紅 (たいこう)



居飼 (いかい)



白張 (はくちょう)



直衣 (のうし)



平安 11 世紀頃

布袴 (ほうこ)



束帯 (そくたい)



束帯 (そくたい)



褐衣 (かちえ)



宿徳装束 (しゅうとくしょうぞく)



直衣 (のうし)



狩衣 (かりぎぬ)



平安 12 世紀頃

強装束 (こわしょうぞく)



小直衣 (このうし)



狩衣 (かりぎぬ)



直垂 (ひたたれ)



水干 (すいかん)



下腹巻 (したはらまき)





■平安～室町時代頃の女子の装束

乳幼児死亡率が非常に高かった時代、子どもの健全な成長を祝う気持ちは、現代よりもはるかに切実で大きいものでした。生後50日、100日から、3歳、5歳、7歳など陽数の節目など大いに祝い、衣服も切り替えていました。

<p>成人式の装束</p> <p><b>裳着 (もぎ)</b></p>	<p>少女が正装として着ていた装束</p> <p><b>細長 (ほそなが)</b></p>	<p>日常の女兒の装束</p> <p><b>褌の汗衫 (けのかざみ)</b></p>	<p>着袴以降の代表的な女兒の装束</p> <p><b>重袂 (かさねあこめ)</b></p>	<p>幼児期の装束</p> <p><b>紐付き衣 (ひもつきころも)</b></p>
<div data-bbox="133 409 623 1050" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: right;"><b>裳着</b></p> <p>女子に裳を着ける儀式。衣類を裳の腰(紐)で束ねて前が広がらないようにするのは、成人女性ならではのたしなみといえる。</p>	<div data-bbox="667 409 1172 1134" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: right;"><b>細長</b></p> <p>このほかにも、子ども用に幅が細い各種の衣類を「細長」と呼んだため、その形状などについて諸説が生まれた。</p>	<div data-bbox="1276 409 1676 1197" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: right;"><b>褌の汗衫</b></p> <p>薄物で、肩を縫わずに開ける「ゆだち」を紐で留めた。全体的に開放的な衣類である。</p>	<div data-bbox="1825 409 2226 1155" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: right;"><b>重袂</b></p> <p>子どもには引きずる衣は不向きなので、短い袂を着用した。何枚も重ねることで重ね色目(78頁参照)を楽しんだ。</p>	<div data-bbox="2329 409 2760 882" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: right;"><b>紐付き衣</b></p> <p>幼児はまだ帯を使って衣類を束ねることをせず、衣に縫い付けられた紐を後ろで結んで束ね留めた。「着袴」という現代の七五三にあたる儀式で紐付き衣を卒業し、帯で束ねる衣を着るようになる。</p>
<p>15～16歳、ほぼ結婚が決まった時には「裳着」をして裳を着用して、成人女性として扱われるようになります。ただし若いうちの袴や単、小袖には紅ではなく「濃(こき)」を用いられることが多くありました。濃は濃い蘇芳色、濃いワインレッドのような色です。</p>	<p>少女が正装として着たといわれる「細長」は諸説ありますが、「袿」と同じような垂頸(たりくび)タイプの衣で、衿(おくみ)がないため幅が狭く、丈の長いものとされるのが一般的です。近世にはその形式の細長が公家の少女用として用いられています。</p>	<p>「汗衫」も女兒服として用いられたものですが「褌(日常用)」と「晴(儀式用)」の2種類がありました。褌の汗衫は、切袴に単と袂を重ね、その上に対丈の汗衫を羽織った形です。晴の汗衫は「裾の長い鬘袂袍(けつてきのほう)」のような装束で、儀式でも用いられた女兒の正装です。</p>	<p>着袴以降の代表的な女兒服が「重袂」です。裾を引きずらない丈の衣を「袂」と呼び、その袂を袴の上に打ちかける日常の姿でした。</p>	<p>幼児期は、対丈の衣に紐を縫いつけ、身体に回して後ろで結ぶ簡単な衣類を着ていました。3～6歳頃に「着袴(現代の七五三)」という儀式で袴をはくようになり、着袴の後は女の子らしい衣服を着るようになります。</p>



■平安～室町時代頃の男子の装束

子どもの装束は、全般的に可愛らしさが重視され、動きやすさも大切にされました。生地には華やかな浮織物が多用されましたが、これは擦り切れやすい欠点があります。成長が早い子供用として、長持ちするかよりも見かけの可愛らしさを重んじたものと考えられます。

成人式の装束 童形束帯（どうぎょうそくたい）	上流貴族の子弟の行儀見習の装束 童直衣（わらわのうし）	最もポピュラーな子どもの装束 水干（すいかん）	上流階級の子どもの装束 半尻（はんじり）
<p style="text-align: right;">童形束帯</p>  <p>身幅が狭い割に裾が長いので、文献上は「細長」とされることも多い。平安時代は「赤色」も多かった。</p>	<p style="text-align: right;">童直衣</p>  <p>サイズが小さいだけで、形式は大人用の直衣と同じ。指貫は亀甲地に臥蝶丸文様など、華やかなものも用いられた。</p>	<p style="text-align: right;">水干</p>  <p>最もポピュラーな童装束。牛車の牛飼は何歳であっても童扱いであったので、高齢でも着用した。</p>	<p style="text-align: right;">半尻</p>  <p>華やかな浮織物の生地で仕立てられ、袖括の緒も「毛抜き形」とした。皇子は毛抜きのなかに小さな菊綴を付けた。</p>
<p>現在の成人式にあたる元服に際しては、「童形束帯」を用いました。これは活発な子どもにふさわしい鬘袂袍（けつてきのほう）で、元服前は無位の当色の黄色を用いました。天皇や皇太子（近代では皇族も）は、「空頂黒幘（くうちょうこくさく）」と呼ばれる額当を頭につけました。</p>	<p>上流貴族の子弟が行儀見習として宮中に上がる「童殿上」に際しては、「童直衣」を着用しました。これが大人の直衣と同じような形式ですが、袍（ほう）の文様は天皇と同じ小葵です。</p>	<p>中級以下の貴族の子どもたちは、「水干」を着用することが多かったようです。これも動きやすく活発な子どもに適した衣類で、牛若丸のような寺院の稚児や、武家に使える「小舎人童（こどねりわらわ）」の装束として多く用いられました。子ども服ならではの可愛らしさを多く盛り込み、袖括の緒を半尻のように毛抜き形にすることもあり、大きくなった菊綴は、上衣に5か所、袴に4か所つけられました。</p>	<p>着袴（現代の七五三にあたり儀式）以降の男児の服装として代表的なものが「半尻」です。狩衣のようですが、子どもは活動的なので、じゃまにならないように通常の狩衣よりも後身の裾（尻）を短くします。これが「半尻」で、上流階級で用いられました。現代の皇室でも「着袴の儀」で半尻装束が用いられています。</p>